

会長の時間 ●富田会長

10月はロータリーの「経済と地域社会の発展月間」ですが、日本では独自に「米山月間」とされている為、本日は、日本のロータリーの父、「米山梅吉と米山記念奨学会」について話をしたいと思います。

米山梅吉は1868年に東京で生まれ、幼少で父と死別後、三島大社の神官の娘である母の手一つで、静岡県三島付近で育てられました。16歳の時、上京し、働きながら東京英和学校（現・青山学院）で勉学に励み、19歳の時、名門米山家の養子となってから、NYの大学などで8年間、留学生活を送りました。帰国後、養家の娘はると結婚し、友人の井上馨の薦めで1897年に三井銀行に入行して、1909年、常務取締役役に就任しました。1914年に引退後の社会奉仕活動を予見するように「新隠居論」を著しましたが、その言葉通り、社会奉仕活動を始めました。1917年、アメリカで福島喜三次と出会い、1920年10月20日に日本初のロータリークラブである東京ロータリークラブを設立し、初代会長に就任しました。続いて1924年、三井信託の創立。1934年、三井報恩会の初代理事長就任。ハンセン病研究など多くの社会・医療事業奉仕。1937年、青山学院初等部の創立。1938年、貴族院議員を経て1946年に78歳の生涯を閉じました。

「何事も人々からして欲しいと望むことは人々にもその通りにせよ」これは米山梅吉の願いであり、生涯そのものでした。他人への思いやりと助け合いの精神を以て行いつつ、そのことについて多くを語らなかった陰徳の人と伝えられています。

1952年、東京クラブにより、米山梅吉の遺徳を偲んで、ロータリアンからの寄付を基に「日本在住の私費留学生に奨学金を支給する」国際奨学事業として米山奨学事業が発足しました。そして、「今後、日本の生きる道は平和しかない。それを世界に理解して貫くためには、一人でも多くの留学生を受け入れ、平和を求める日本人と出会い、信頼関係を築くこと。これこそが、日本のロータリーに最もふさわしい国際奉仕事業ではないか」というロータリーの信念を基にして、日本の全クラブの共同事業となり、1967年文部省の許可を得て、財団法人ロータリー米山記念奨学会となりました。事業の使命は「将来、日本と世界を結ぶ懸け橋となり、国際社会で活躍し、ロータリー運動の良き理解者となる人材を育成すること」とされました。

米山奨学生の採用数はロータリー財団国際親善奨学生とほぼ同規模で、現在、民間では日本最大規模であり、出身国は123ヶ国に及びます。

DEIを推奨するロータリーの米山関係者にロータリアンから良く「反日の国の留学生や比較的裕福な私費留学生を支援するのは如何か」という批判が寄せられるそうですが、これに対して、米山奨学会は、「応募絶対数が多く、優秀な学生が多い中華系の奨学生に偏ること。実際、米山奨学生は将来、日本の立場になって活躍している人が多いこと。選考基準に貧富は無関係であること」を理由として説明されています。米山奨学会は直接、米山梅吉が始めたものではありませんが、彼が始めた社会奉仕活動の流れは、今も日本のロータリーの清らかな流れとなって脈々と受け継がれていると感じます。